



Title	職場・業務紹介 畜産資源開発学講座副生物利用学分野
Author(s)	山川, 育生
Citation	北海道大学大学院農学研究科技術部研究・技術報告, 10, 18-18
Issue Date	2003-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35450
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_p18.pdf



<職場・業務紹介>

畜産資源開発学講座 副生物利用学分野 山川 育生

職場紹介

1992年の学部改組によって副生物利用学講座として出発しておりますが、その歴史を辿ると、皮革製造学講座として、1920年に開設され、その準備の為1917年米国よりロイド ボルダーストン先生を招き、1926年ウィーン工科大学講師ゲオルググラッサー先生が赴任。その後先本先生、大杉先生、近藤先生、そして現在の中村先生へと一連の研究が受け継がれております。英文の書物だけでなく、独文の書物が残っているのはその影響が多少あるのかも知れません。

仕事内容

教室では副生物利用と言う事で、肉以外の組織に対する研究がされておりますが、私に任せられた仕事は良き革、毛皮を作る事であり、その為に正確な理論、知識をつける事であります。ここでは、まず日本の革の現状から、話してみたいと思います。

日本の製革業は、牛皮を関西地区、豚皮、羊皮を関東地区と集中立地しており、製革従業員として、6000名強、皮革加工業としては40000名強でそれなりの産業として成り立っております。しかし、豚皮を除いて原料生産国でもなく、発展途上国と比べて賃金も高いので、高品質、高能率で乗り切るしか有りません。

次に、日本人は欧米人と比較して、革の知識に乏しいと言われております。それは日本人が農耕民族でゲタを履いているからだと言う人もおります。私には日本人が革に関心が有るのか、無いのか判りませんが、肉を食べれば、必ず皮や骨は発生し、なにより仕上がった革や毛皮の、なめらかな手触りは魅力的です。

その魅力を学生実習で伝えて、革や毛皮に対する理解を深める役にたてればと考えております。

抱負

全国国立大で皮革工場が有るのは北大だけで、多少プレッシャーは感じますが、色々と経験を重ねて、精通していきたいと思います。

又鞣しの作業は、強力な酸、アルカリ、酸化剤を使用し、時には硫化水素も発生します。薬品の性質を理解して事故の無い様、注意していきたいと思います。